

わが校風について

村田 憲正 (新18回生)

往事茫茫——といいますが、卒業以来三〇年以上経って、なお印象に残るのは、その自由な校風です。

高校時代というのは、多くの可能性を秘めているとは言うものの、逆に言えば、目標が定まらず、不安の多い時代——ちようどコロイドのような状態にあります(ちなみに私は化学部員でした)。こういう時は、得てして一定の基準を求め、とりあえず形を整え、安心する——ということ、生徒も先生もそして父兄も、期待し、強制するところがあるように思います。

しかし、我が校について言えば、これが、極めて少なかった。個性的な先生が多かったにもかかわらず、あるいはかえってそれ故に、こういう短兵急な態度はとらず、大らかに生

徒の熟成を待つ——というところがありました。

このような学校の雰囲気は、当時も、田舎から出てきてボンヤリの私にとって有り難かつたのですが、今、考えてみると、より一層大切なことに思われます。もちろん、こういう校風は、現在の受験一辺倒の流れの中では、割に合わない、時代遅れの教育に見えるかも知れません。

しかし、一世を風靡している偏差値万能の教育には、もう行き詰まりが見られます。能率を重んじ、即効性を求める教育は、つまるところ真の力を養わず、逆に新しい問題に取り組む力をスポイルするように思われます。私自身、報道の仕事に携わるようになり、いろいろな分野の人間に接してみると、その



III日の別費の勢揃い(昭和30年)

時は迅速にみえても、じっくり基礎に時間をかけた者ほど、その人格に奥行と幅を感じさせ、かつ更に成長を続けていくようにみえます。これは、自分の同期を見回しても実感するところです。所詮、人間は、野菜ではなく、促成栽培は効きません。

そして、腰を据えた余裕のある教育が出来るのが、伝統ある、少数制の私学の最も良い

ところだと思えます。

現代のような、激動し、変容する時代にこそ、古くとも、良いものは守らねばなりませんし、本物は輝きを増してゆきます。この点、私が最近、我が意を得たり——と思っているのが、物理部の活躍です。「超伝導」をはじめとする一連の、高校生離れたユニークな研究は、高く評価されています。そこには、

ギスギスした詰め込み式の教育ではなく、先生と生徒の活発な遣り取りの中で、個性と才能を発揮してゆく、伸びやかで自由な空間があります。二一世紀を担う人材は、こういう中から生まれて来ると思えます。

後生畏るべし——彼らに敬意を表するとともに、彼らを育んだ岩高の美風が、今後も脈々と受け継がれてゆくことを望みます。